愛媛大学教育学部紀要　第65巻　117～125　2018

母と娘との密着関係における規定因と帰結の検討

（教育臨床講座）江上園子
（高取町立たかむち小学校）中田沙也加

Determinant and outcome of Mother-daughter connected relationships

Sonoko EGAMI and Sayaka NAKATA

（平成 30 年 6 月 21 日受理）

本研究は，青年期後期の娘とその母親が密着した関係を築く要因とその密着した関係と母子それぞれの適応との関係を検討するものである。娘である女子大学生とその母親それぞれに質問紙を配布し，母子密着の程度を測定し，娘と母親それぞれで密着した関係を築く規定因を調べた結果，母親の場合はこれまでの娘への受容的な養育態度を示す「情愛」が高いこと，娘の場合も母親の自分への受容的な養育態度を認知する「情愛」の高さ，そして母親が自分の行動を掌握しコントロールして依存させようとする態度の認知である「依存期待」の低さ，自分の身の回りのことをこなせる認知である「生活力」の低さが密着関係と関連していることがわかった。さらに，母親と娘を密着度の高低の群でそれぞれ分け，母子ともに密着度が高い群を「密着群」，密着度にズレがある群を「母娘ズレ群」，密着度がともに低い群を「独立群」としてペアデータとして扱い，母親と娘のそれぞれの立場での適応の良さを発達的に分析したところ，「密着群」の母子の方がお互いとの関係に満足し，母親では「娘自立評価」（娘の自立した姿を肯定的に評価）を高く評定し，娘は母親へ「感謝の念」や「人生のモデル」，「対等な関係」のすべてにおいて高い評価を下し，母親を精神的な拠り所とする「母への依存」も高いという結果となった。したがって，母娘関係の密着に関するこれまでの臨床的な報告とは異なり，本研究では母親と青年期後期の娘との密着した関係はおおむね親密性の保持や信頼感の高さなどの良好な姿として捉えられた。

問題と目的

近年，我が国では“仲良し母娘”や“一卵性母娘”と呼ばれる母と娘関係が増加している。この言葉が出てきたのはここ 20 年程度のことで，青年期後期頃に娘と母がまるで姉妹のように非常に親密な関係を結び，相互依存する現象のことである(信田, 1997)。それについて渡邊(1997, 2003)は，母と娘の関係においては，息子と父親あるいは母親や，娘と父親の関係に比べ，他者との相互理解・信頼関係に基づいて他者を心の支えと出来る肯定的な結びつきと，否定的な意味を前提とした他者への情緒的な依存を基にした結びつきが分離していない状態であると述べている。

実際に，1994 年の経済計画庁国民生活局編『家庭と社会に関する意識と実態調査報告書』によると，家族内で自分を一番理解してくれているのは誰かという問に，未婚 20 代男性は父 20%母 27%という結果に対して，未婚 20 代女性は父 5%母 45%という結果となっている。北村・無藤(2003)も，女性同士では親子の結びつきが幼少期はもちろん青年期以降も維持され，アイデンティティ発達や心理的適応について，その関係が様々な機能を果たすとしている。例えば女子は親との信頼関係を軸として自己の確立にいたる傾向があり(福島, 1992)，娘は同じ親でも同性である母親の視点との対比で自己の視点を捉え，柔軟かつ相互に作用しながら総体的には肯定的な関係を保つことが母娘双方の適応状態を導く(Lichtwarck-Aschoff et al., 2009)という経路が想定される。当然，母と娘の関係と言ってもその関係性は様々にある。國吉(2015)によると，母娘関係の距離が非常に近く濃密であるもの・娘の反抗が強く，いがみ合う母娘・家に居つかない娘も存在する。また，母親が娘にジェラシーのような感情を抱き，娘を可愛いと思えないと言うケースも存在すると述べている。このように，様々な母娘関係がいる中でも，母娘関係の距離が非常に近く濃密である母娘が増加し，それが周知され始めている現状がうかがえる。それでは，これまでの先行研究で母子の密着関係は問題視されているのだろうか。それとも，逆に正常かつ必要なこととして見なされているのだろうか。

まずは母子密着関係による問題として，母子分離不安や精神的，経済的，物理的等の自立抑制がある。田村(2011)は，娘の母

に対する親密性と依存性が高い群は他の群に比べて主体性，判断･責任性といった個としての発達の程度が低いとしている。つまり，母親に精神的に頼りきっており，自分 1 人で解決出来ないまたはしようとしない，母親任せの状態であると言える。また，臨床現場においても母子密着を問題とする事例は多く報告されている。その特徴として，娘がいい娘を演じるあまり神経症の病を発症したり，母親の支配が強すぎることで娘が摂食障害に陥ったりするなど(村重･上地・松本，2007；信田，1997, 2008；高石, 1996)娘側に息苦しさが生じていながらも離れることが出来ないというジレンマの上に成り立つ関係にあることが分かる。

一方，母と娘が密着関係であることは，悪い影響ばかりではなく，適応的な面もある。例えば，田村(2011)は，娘の母に対する親密性と依存性が高い群は抑うつ傾向の低さと関係満足度が高いと示しており，良好な関係性がうかがえるとしている。さらに，成人期を目前にしても娘の精神的自立という観点から見ると，息子のそれとは異なるものであるという指摘も数多い。水本・山根(2010)によると，母娘関係においては一定の距離を保ったまま自立が成し遂げられるとしており，田村(2011)の結果でも，娘の精神的自立に結びつく母娘の距離の近さは，相互の信頼関係に基づく親密的な関係性によるものと示唆されている。新美ら(2006)では，母と娘の絆の維持・発展にはコミュニケーションが大きな役割を果たしており，その中でも，依存から自立へと変化する母娘関係を反映するのは「友人的コミュニケーション」が重要だと示唆された。ここでの「友人的コミュニケーション」とは，共行動，メール交流，電話交流を表している。これは，対面は然り，離れている場所からでも交流を持っていること，すなわち母子の交流や接触が密な状態が，娘の自立に対して良い影響を及ぼすとされていることが分かる。

以上のように，母と娘との関係には強い結びつきがあるとされる(水本・山根, 2010)ことや，その関係は他の関係と邪魔をし合うことがなく， 女性は母親との近い距離を生涯にわたって保持すると言われる(Fischer, 1991, 渡邊, 1993)ことが，母娘関係の密着度が高くなる関係的な要因として考えることが出来る。そしてその密着状態が，母娘それぞれの自立や精神的健康に影響を及ぼしていると想定される。

それでは，母親と娘の関係性を密にさせる個人的な要因とは何であろうか。また，母親の立場において，娘との密着関係はどのような意味を持つのであろうか。これまでの研究では，母子密着の研究は娘の立場における適応や自律について示唆されているものは多いが，母親と娘とのペアデータから密着関係の規定因やその帰結を母と娘のそれぞれの立場から明らかにしたものは稀少である。成人期の母親と青年期娘のそれぞれの立場において，密着を促す規定因と密着がもたらす帰結を探ることは，家族関係の観点だけではなく，発達心理学的見地からも重要な示唆を得られるだろう。

そこで本研究は第一の目的として，母娘関係を密着させうる個人的な要因を母と娘それぞれで検討することとした。その際，母側の要因として，「母性愛」信奉傾向(江上, 2005, 2007)を挙げる。これは「社会文化的通念として存在する伝統的性役割に基づいた母親役割を信じそれに従って育児を実践する傾向」と操作的に定義されたものであるが，この傾向が強い母親は子どもや育児に重きを置いていることから，母親のこのような姿勢が母子密着関係に作用すると考えた。二つ目は夫婦間満足度(諸井, 1996)を想定する。飛田・狩谷(1992)は，父母がパートナーのことを肯定的に評価していると娘も父母に対して肯定的に評価することを示した。さらに，母が父を非好意的に評価していると認知することが，母親と娘のコミュニケーションや，娘の母に対する尊敬と密接に関連することが示された。高木・柏木(2000)は，父母関係に注目し，夫との関係が良好であるほど母親の「娘が理解者」という感情が低く，逆に関係が良好でないほど「娘が理解者」とする傾向が高まることを示している。このように，母と父の関係も母娘の関係に影響しているのである。なお，これは家族システム理論(亀口, 1992)の観点とも一致するところである。そして，母親の娘へのこれまでの関わり方も，娘が自立を迎える前後の関係性に作用している可能性も想定されることから，これまでの母親の娘への接し方も挙げる。

娘側の要因としては，青年期であることから，発達的には共に過ごす相手として一般的には同性の友人関係が占める割合が大きい。したがって，友人関係への精神的な依存の割合が母娘関係の密着と関連すると考えられることから，同性の友達との付き合い方として親和動機を想定する。次に，これまで母親がどのように自分に接してくれたと感じているか，ということも現在の母娘関係に影響すると考えられることから，母親の娘への関わり方も重要であると考えられる。最後に，対象者となる女子大学生は青年期後期であることから，自立の意識について精神的に比重が増していると思われる。この自立の自覚の程度によって，母親との密着関係も左右されると思われることから，

自身の自立認識も挙げる。

第二の目的として，母娘をペアデータとして取り扱い，それぞれが捉える密着度を算出し，母高群・娘高群(=密着群)，母高群・娘低群と母低群・娘高群(=母娘ズレ群)，母低群・娘低群(=独立群)の 3 群に分類し，それらの群において，良好な親子関係という面で差があるのか，分析を行いたい。青年期後期の親子関係ということを考慮し，母親側では，子どもの自立に対する意識，娘との関係満足度，現在の娘の姿に対する満足度を想定する。娘側では母と娘の「絆」の感覚，母親との関係満足度，現在の母への満足度，を帰結として設定する。

本研究を通して，今日，社会的な話題として取り上げられている母娘の密着関係の規定因とその帰結を明らかにし，現代における母娘関係の意義を見直したい。

方法

調査協力者

松山市内の大学に通う女子大学生 18～23 歳と，その母親。質問紙を母親・娘ともに 137 部配布し，娘は 109 部，母親は 74 部回収した。回収率は娘が 79%，母親が 54%であった。したがって，母親と娘の質問紙がそろったものは74組となる。分析の際，娘のみのときは 109 部を対象とし，母親のみのときは 74 部を対象，ペアデータとして分析する際には双方のデータがそろっている 74 部を対象とする。娘の平均年齢は 19.1 歳(SD:1.1)，母親の平均年齢は 47.9 歳(SD:6.8)であった。

調査手続き

調査は 2017 年 7 月～11 月に，個別記入形式で無記名式の質問紙で実施された。娘用と母親用の質問紙は，配布前から ID をペアにして質問紙の裏に記載したものを，娘(学生)は授業内で配布し回収した。母親については，娘と同居している場合は娘が持ち帰り，回答して郵送あるいは後日の授業時に直接，当該学生から回収した。質問紙には，協力は強制ではないこと，無記名式の調査であり，回答後も質問紙は研究室の厳重な管理のもとに保護すること，研究が終了した後はただちにシュレッダーで処理することなどを明記した。娘と母親が別居している場合は，学生に封筒を渡して住所を記入してもらい，その中に質問紙と返信用封筒を入れ，郵送した。そして後日，返信用封筒を用いて返送してもらった。封筒はただちにシュレッダーで処理した。回答はいずれも無記名で記入するもので実施時間は娘用の質問紙も母親用の質問紙も約 20 分程度であった。

調査内容

母親用の質問紙の構成は，下記の通りである。

(1)年齢や就業形態などのフェイスシート

(2)夫婦関係満足度尺度(諸井, 1996); 4 件法

(3)「母性愛」信奉傾向尺度(江上, 2005, 2007); 5 件法

(4)Parental Bonding Instrument (PBI)尺度の邦版(井上ら, 2006); 6 件法

(5)母子密着尺度(藤田, 2003); 5 件法

(6)子どもの自立に対する意識尺度(長崎, 2004); 5 件法

(7)娘との関係満足度 1 項目 5 件法

(8)「娘がどんな風に育ったと思うか」自由記述項目

(9)現在の娘の姿への満足度 1 項目 5 件法。

(10)「娘に対していま思っていることや伝えたいこと」 自由記述項目

娘用の質問紙の構成は，下記の通りである。

(1)年齢や学部などのフェイスシート

(2)親和動機尺度(杉浦, 1996); 5 件法

(3)母と娘との絆尺度(新美, 2006); 5 件法

(4)Parental Bonding Instrument (PBI)尺度の邦版(井上ら, 2006); 6 件法を娘の立場からのものに改作したもの

(5)母子密着尺度(藤田, 1998); 5 件法

(6)自立尺度(大石・松永, 2008); 5 件法

(7)母親との関係満足度 1 項目 5 件法

(8)「母親がどんな風に育ててくれたと思うか」自由記述項目。

(9)現在の母親についての満足度 1 項目 5 件法。

(10)「母親に対していま思っていることや伝えたいこと」 自由記述項目

結果

各尺度の因子分析結果

①母親対象の尺度

夫婦関係満足度尺度(諸井, 1996) の全 6 項目について主成分分析を行ったところ，スクリープロットにおいて一次元性が確認できた。なお，諸井(1996)でも一因子構造が見いだされている。6 項目の信頼性係数(Cronbach α)は.93 であった。

「母性愛」信奉傾向尺度(江上, 2005, 2007))の全13項目について主成分分析を行ったところ，スクリープロットにおいて一次元性が確認できた。江上(2005, 2007)でも一因子構造が見いだされている。成分量が.4を下回る9項目を削除し，残りの18項目を採用することとした。18 項目の信頼性係数(Cronbach α)は.91であった。

PBI尺度(井上ら, 2006) の全22項目について主成分分析を行ったところスクリープロットにおいて三因子解が推測されたため，因子分析(主因子法)を三因子に指定して行った。その結果，項目内容から第一因子は「母 : 情愛」(9項目)，第二因子は「母 : 依存期待」(5項目)，第三因子は「母 : 意思尊重」(3項目)と命名した。それぞれのα係数は順に.81，.68，.76である。

母子密着尺度(藤田, 2003) の全27項目について主成分分析を行ったところ，スクリープロットにおいて一次元性が確認できた。成分量が.4を下回る9項目を削除し，残りの18項目を採用することとした。18 項目の信頼性係数(Cronbach α)は.87であり，十分な内的整合性を持つと判断した。項目内容は下記の表1の通りである。

表1　母子密着度尺度18項目(母親)

2. 買い物などに娘と一緒にでかけることがよくある
3. 外に出ているとき，娘と電話で連絡を取ることがよくある
6 私は娘を失ったら生きる力をなくしてしまうと思う
8. 私は娘の友だちのことをよく知っている
11. 私が怒ると娘は反省する
12. 私は娘のことを常に思っている
13. 娘に何かを頼まれたら断りづらい
14. 娘が考えていることはよくわかる
15. 娘の顔を見るとなんとなく安心する
16. 娘は私の考えを，なんとなくわかっていると思う
17. 私の元気が無かったら，娘は私を励ましてくれる
18. 娘が何かを探していたら，私も一緒に探してあげる
20. 私は何かを頼むとき家族のだれよりもまず娘に頼む
21. 娘とは毎日何かしらコミュニケーションを取っている
22. 私は娘にその日あった出来事や仲間のことをよく話す
23. 私は自分の悩み事をよく娘に相談した
24. 子どもたちがけんかをしているときよく娘の味方になった
26. 私は娘の機嫌がいいか悪いか何となく察知できる

子どもの自立に対する意識尺度(長崎, 2004) の全18項目について主成分分析を行ったところスクリープロットにおいて三因子解が推測されたため，因子分析(主因子法)を三因子に指定して行った。その結果，項目内容から第一因子は「娘自立尊重」(9項目)，第二因子は「娘自立評価」(5項目)，第三因子は「娘自立不安」(3項目)と命名した。それぞれのα係数は順に.87，.86，.7である。

②娘対象の尺度

親和動機尺度(杉浦，1996)の全17項目について主成分分析を行ったところスクリープロットにおいて二因子解が推測されたため，因子分析(主因子法)を二因子に指定して行った。その結果，項目内容から第一因子は「否定的親和動機」(7項目)で第二因子は「肯定的親和動機」(7項目)と命名した。それぞれのα係数は.86と.89である。

母と娘との絆尺度(新美ら, 2006) の全23項目について主成分分析を行ったところスクリープロットにおいて四因子解が推測されたため，因子分析(主因子法)を四因子に指定して行った。その結果，項目内容から第一因子は「感謝の念」(8項目)，第二因子は「対等な関係」(6項目)，第三因子は「人生のモデル」(3項目)，第四因子は「母への依存」(4項目)と命名した。それぞれのα係数は順に.93，.82，.9，.82である。

PBI尺度(井上ら, 2006) の全22項目について主成分分析を行ったところスクリープロットにおいて三因子解が推測されたため，因子分析(主因子法)を三因子に指定して行った。その結果，項目内容から第一因子は「娘 : 情愛」(9項目)，第二因子は「娘 : 依存期待」(5項目)，第三因子は「娘 : 意思尊重」(3項目)と命名した。それぞれのα係数は順に.84，.8，.78である。

母子密着尺度(藤田，2003)の全27項目について主成分分析を行ったところ，スクリープロットにおいて一次元性が確認できた。なお，藤田(2003)でも一因子構造が見いだされている。成分量が.4を下回る9項目を削除し，残りの18項目を採用することとした。18項目の信頼性係数(Cronbach α)は.88であり，十分な内的整合性を持つと判断した。項目内容は下記の表2の通りである。

表 2　母子密着度尺度 18 項目(娘)

2. 私は買い物などに母と一緒にでかけることがよくある
3. 外に出ているとき，母と電話で連絡を取ることがよくある
6. 私は母を失ったら生きる力をなくしてしまうと思う
7. 私は部屋へ母が入ってきても特に気にならない
8. 母は私の友だちのことをよく知っている
11. 私は母に叱られると悪いなあと思う
12. 母は私のことを常に思ってくれている
14. 私が考えていることを母はよく知っている
15. 母の顔を見るとなんとなく安心できる
16. 私は母の考えは，なんとなくわかっているように思う
17. 私の元気が無かったら，母は私を励ましてくれる.
18. 母が何かを探していたら，私も一緒に探してあげる
19. 母はその日私が何を食べたいのか，心得てくれている
21. 私は母と毎日何かしらコミュニケーションをとっている
22. 私は母にその日あった出来事や仲間のことをよく話す
23. 私は自分の進路や進学の際によく母に相談した
25. 私は母の誕生日にはお祝いしたりプレゼントを贈ることがよくある
26. 私は母の機嫌がいいか悪いか何となく察知できる

自立尺度(大石・松永, 2008) の全 26 項目について主成分分析を行ったところスクリープロットにおいて四因子解が推測されたため，因子分析(主因子法)を四因子に指定して行った。その結果，項目内容から第一因子は「対人関係能力」(4 項目)，第二因子は「自己判断」(5 項目)，第三因子は「生活力」(3 項目)，第四因子は「自己管理」(4 項目)と命名した。それぞれの α 係数は順に.86，.78，.81，.64 である。

各尺度の記述統計結果

因子分析結果に基づき，母親の各尺度得点を算出し，その平均値と SD について表 3 に示す。(夫婦関係満足度尺度については何らかの理由で夫がいない調査対象者が相当数見られため，今後の分析や検討からは削除することとした。)

表 3　各尺度(因子)の記述統計結果(母親)

尺度(因子)名	平均値(*M*)	標準偏差(*SD*)
母子密着度尺度	60.35	10.86
「母性愛」信奉傾向尺度	43.03	8.92
情愛	22.72	3.93
依存期待	14.20	3.46
意思尊重	14.31	2.31
娘自立尊重	17.03	3.93
娘自立評価	25.15	4.84
娘自立不安	12.01	2.54

同様に，因子分析結果に基づき，娘の各尺度得点を算出し，その平均値と SD について表 4 に示す。

表 4　各尺度(因子)の記述統計結果(娘)

尺度(因子)名	平均値(*M*)	標準偏差(*SD*)
母子密着度尺度	65.56	12.33
否定的親和動機	25.61	5.43
肯定的親和動機	32.76	5.83
情愛	34.63	4.95
依存期待	10.19	4.37
意思尊重	13.27	3.20
対人関係能力	15.87	2.47
自己判断	20.03	3.10
生活力	11.45	3.54
自己管理	12.92	3.26
感謝の念	36.49	4.45
対等な関係	23.38	4.20
人生のモデル	11.66	2.60
母への依存	17.07	2.71

重回帰分析結果

母親の娘への密着度を高める要因について検討するため，母親の母子密着尺度得点を目的変数，「母性愛」信奉傾向尺度得点ならびに PBI 尺度得点を説明変数とした重回帰分析を行った。結果は表 5 の通りである。

表５　母子密着度を目的変数とした重回帰分析結果(母親)

	β	t	R^2	F
母性愛信奉	0.208	1.783	0.344**	9.036**
情愛	0.300**	2.664		
依存期待	0.093	0.781		
意思尊重	0.326	2.933		

**p<.01

この結果より，母親の娘への密着度を高めているのは「母：情愛」であることがわかった。

娘の母親への密着度を高める要因について検討するため，娘の母子密着尺度得点を目的変数，親和動機尺度得点ならびにPBI 尺度得点と自立尺度得点を説明変数とした重回帰分析を行った。結果は表６の通りである。

表６　母子密着度を目的変数とした重回帰分析結果(娘)

	β	t	R^2	F
否定的親和	0.112	1.768	0.664**	21.731**
肯定的親和	0.026	0.416		
情愛	0.655**	10.395		
依存期待	-0.135*	-2.038		
意思尊重	0.125	1.837		
対人関係能力	0.082	1.176		
自己判断	0.017	0.263		
生活力	-0.18**	-2.966		
自己管理	0.107	1.686		

**p<.01　　*p<.05

この結果より，娘の母親への密着度に影響しているのは「娘：情愛」と「娘：依存期待」と「生活力」であることがわかった。

分散分析結果

母親と娘がペアデータとして揃っている74組を対象に，ペアを次のように分類した。まずは母親と娘それぞれで，母子密着尺度得点の高低で２群に分ける。その後，母親と娘の高低の組み合わせにより，次の４群ができる。母娘双方が高い群(=密着群)：30組，母親は高いが娘は低い群：7組，母親は低いが娘は高い群：12組，両方ともに低い群25組(=独立群)である。しかし，サンプル数に違いがあるため，母親と娘の得点にズレが見られる２種類のペアをひとつの群にまとめ，母娘ズレ群(19組)として設定した。

母親と娘の各ペアを独立変数，そして母親側では「子どもの自立に対する意識」尺度得点，娘との関係満足度，現在の姿に対する満足度を従属変数とした一元配置分散分析を行った。娘側では「母と娘の絆尺度」得点，母との関係満足度，現在の母親への満足度を従属変数とした一元配置分散分析を行った。

その結果，母親においては，「娘自立評価」因子得点において有意差が認められ($F(2, 73)=17.31$, p<.001)，Tukey 法による多重比較により，「独立群」と「密着群」ならびに「母娘ズレ群」との間にそれぞれ有意な差が認めら(p<.001, p<.01)，「密着群」，「母娘ズレ群」，「独立群」の順で得点が高いことがわかった。同様に，娘との関係満足度($F(2, 73)=9.983$, p<.01)ならびに現在の娘に対する満足度($F(2, 73)=5.124$, p<.01)についても群による有意な主効果が見られ，いずれも「独立群」よりも「密着群」の母親の方の得点が有意に高いことがわかった(p<.001, p<.05)。

そして娘においては，「感謝の念」($F(2, 73)=17.628$, p<.01)，「対等な関係」($F(2, 73)=6.613$, p<.01)，「人生のモデル」($F(2, 73)=8.75$, p<.01)，「母への依存」($F(2, 73)=9.866$, p<.01)において，ぞれぞれ群による有意な主効果が見られた。その結果，すべての従属変数において「密着群」と「独立群」との間に有意な差が見られ，いずれの得点も「密着群」が高いという結果となった(p<.01, p<.01, p<.001, p<.001)。同様に，母親との関係満足度($F(2, 73)=8.961$, p<.001)ならびに現在の母親に対する満足度($F(2, 73)=4.168$, p<.05)についても群による有意な主効果が見られ，いずれも「独立群」よりも「密着群」の母親の方の得点が有意に高いことがわかった(p<.001, p<.05)。

考察

本研究の目的は，母娘関係を密着させうる個人的な要因を母と娘の立場それぞれで検討し，母娘をペアデータとして取り扱い，それぞれが捉える密着度を算出し，密着度が高いペア・低いペア・ズレが見られるペアにおいて良好な親子関係という面で差があるのか，分析を行うことであった。

その結果，母親において娘との密着度を促している要因とは，娘への深い愛情や思いやり，受容的な養育態度を示す「情愛」であった。これまでの養育場面で，母親が受容的な養育態度を示している自覚の高い母親は，現在も娘との親密で強固な関係を認識しているとも言える。そして娘の立場においても「情愛」，

すなわちこれまでの母親の受容的な養育態度が現在の密着関係を高めているという結果であった。これまで，母親からあたたかく思いやりのある接し方をされてきた結果としての現在の密着関係という可能性が示唆された。また，娘側ではその他に，母親が自分を子ども扱いして自分をコントロールし母親への依存を求めるという態度である「依存期待」の高さの認知が，現在の密着関係を低下させるという結果も認められた。これは直観的に，逆説的な結果にも考えられる。なぜなら，精神的な依存というのは母親との近い距離感を想定させるからである。しかしこれは娘の立場からの認識であることから，つまりは娘が母親のこれまでの自分に対する干渉的で独善的な養育態度を強く意識していると，逆に親からの独立と自立が発達の大きな課題である青年期後期の現在は，母親と距離を取っている(取りつつある)ということであろう。また，「生活力」も現在の密着関係の認知に負の影響を与えていることから，密着関係には精神的な依存だけが関係するのではなく，生活的に身の回りのことを母親に頼っていることが，密着関係を低減させているということがわかった。

次に，母親と娘とのペアデータから，密着関係は発達的・適応的に良好な親子関係を築くかどうか，という問いについて考える。結論から言えば，母親と娘の密着度がともに高い「密着群」が，母親の立場でも娘の立場でも良好な親子関係を示すというものであった。母親の立場では密着群の方が，娘の自立している(していく)姿を頼もしく思い，一人の人間として信頼している姿，現在の二人の関係性にも満足している姿がうかがえる。娘においても密着群の方が，母親との現在の関係性に満足している。さらに密着群の娘は，現在の母親を大事に思い感謝の念を抱き，お互いを尊重する対等な関係を築き，母親から人生のモデルを教わったと認識し，一緒にいると安心する関係でなんでも相談したいという精神的な依存心を持っているということがわかった。水本・山根(2010)でも，「密着型」(ただし密着尺度が５因子構成でクラスタ分析により娘のタイプだけをボトムアップに分けたタイプ)の娘は抑うつ度が低いという結果が提示されている。ただしこの先行研究では，本研究の「独立群」に相当する群が見られず，むしろ母親との共行動は低いが母親への配慮やサポートの授受の意識が高い「自立型」の娘の適応が高く発達的にも進んでいるという結果となっている。なお，本研究で得られた「母子ズレ群」は水本・山根(2010)の「母子関係疎遠型」の母親と娘の意識のズレと類似している点もあり，やはり適応や満足度は低いものとなっている。本研究と類型化のプロセスが異なるが，やはり母親と娘の間の「密着関係」は，臨床的な指摘とは異なり，適応的には高いものであった。実際に，母娘それぞれの自由記述項目においても「密着型」の母娘関係のお互いに対する印象の良さが際立っていた(例えば，母親における現在の娘に対する記述として「いろんなことを頑張っている，立派なひとりの女性になってくれて誇らしい」に代表されるポジティブなものが多かった。娘における母親に関する記述も「いつも私のことを考えてくれて応援してくれている母だからこそ，いまの自分がある」等のプラスのものがほとんどであった)。ただし水本・山根(2011)の研究でも，「密着型」は「自立型」へと向かうまでの適応的なプロセス，つまり青年期後期の発達課題のひとつである自立においては未発達の部分を持つということから，母親と娘の「密着した関係」が必ずしももっとも適した関係性とはいえないということにも注意しておかなければならない。

本研究では，青年期後期の娘とその母親を対象にともに質問紙を配布・回答を求め，両視点から研究を進めたものである。母親と青年期や成人期の娘との関係性を扱った研究では，とくに娘側の適応に着目した研究が多い中で，母親にとっての娘との密着関係の要因や適応を調べた本研究は，これまでの研究に新たな視点を加える有意義なデータとなったと言える。とくに娘との関係を「密着したもの」と捉えている母親の方が，逆説的にも娘のひとりの人間としての自立を肯定的に評価しているという結果も興味深い。北村・無藤(2003)でも中年期女性を対象としてその心理的適応を娘との関係から探っているが，本研究により，母親と娘の関係性についての研究において，ペアデータを用いる重要性や有効性が示唆されたのではないだろうかか。

「母子密着」という概念は，ことに青年期後期においてはネガティブなイメージを連想させるものであるが，本研究ではむしろ逆説的な結果となった。母親と娘との密着した関係と，娘の精神的な自立は一見，矛盾した概念であるが，その矛盾を解釈するには大学生という，娘側の立場を考慮に入れなければならない。学生時代のように経済的には親に頼らざるを得ない時期は，実際には自立前の準備期間であると捉えると，密着した

関係と通底する母親と娘との間の信頼関係や密なコミュニケーション，親密性やあたたかな感情の交流は，成人期のそれが持つ意味とは異なり(例えば北村・無藤, 2001)，むしろ大学を卒業してからの本来の「自立」を支える足場となる可能性も見いだせるのである。母親と娘との密着した関係についてのマイナスのイメージは，もちろん臨床的にはその危険性が裏打ちされているものでもあるが，それは臨床例にみられる過干渉や娘の自律性の剥奪などの過度な密着関係のあらわれた例であり，一般的な意味での密着関係は母親と娘との精神的な距離の近さや親密性，信頼感のあらわれとして解釈する必要があるだろう。

様々な知見が得られた今回の研究であったが，いくつかの課題も残る。最初に，本研究では国立大学に在籍する女子学生とその母親を対象に調査を行ったため，比較的恵まれた親子関係のもと育ってきた人が多く，これを広く青年期後期における母娘関係の一般論として語るのは困難であることを認識しなければならない。なお，協力者の集め方についても課題を残した。娘の方は，ほぼ講義内で質問紙に回答したため，回収が容易であった(回収率 79%)。しかし母親は，娘が大学進学を機に１人暮らしをしている場合が多く，母親が遠方にいることもあり，今回得られたペア(=母親)の回答数は 74 部(回収率 54%)であり，やや少なかった。それにより，本来はペアで 4 群でも分類可能なはずが，3 群で分類した結果のみの分析しかできなかった。しかも 3 群の分類でさえ，サンプル数の偏りも起きてしまった。より正確なデータを得るためには十分な協力者を得ることに尽力せねばならない。さらに，今回，密着関係の個人的な要因として挙げたものはほんの一部に過ぎず，本研究が挙げたものがすべてであると決定付けることは無論，不可能である。時代的な背景はもちろん，母親の個人的な属性やライフサイクル，そして娘の過去から現在にわたる様々な要因，ならびに母親と娘をとりまく多くの存在との関係性が複雑に絡み合って母娘関係は形成されているということに留意しながら，様々な視点から，調査を重ねることが求められよう。

文献

江上園子 (2005). 幼児を持つ母親の「母性愛」信奉傾向と養育状況における感情制御不全. *発達心理学研究*, **16**, 122-134.

江上園子 (2007). “母性愛”信奉傾向が幼児への感情表出に及ぼす影響―職業要因との関連―. *心理学研究*, **78**, 148-156.

Fischer, L. R. (1991). Between mothers and daughters. *Marriage & Family Review*, **16**, 237-248.

藤田達雄 (1998). 青年期における理科離れと母子密着の関連性に関する研究. *家族心理学研究*, **12**, 67-76.

藤田達雄 (2003). 思秋期前の妻の孤独感と母子密着に関する研究. *名古屋短期大学研究紀要*, **41**, 75-87.

福島朋子 (1992). 思春期から成人にわたる心理的自立：自立尺度の作成及び発達的検討. *発達研究*, **8**, 67-87.

飛田操・狩谷桂子 (1992). 両親の「仲のよさ」の認知と親子関係. *福島大学教育学部論集*, **51**, 55-63.

井上俊哉・大井京子・西村純一・井森澄江・斉藤こずゑ. (2006). 親子関係の生涯発達心理学的研究Ⅱ―PBI と IPA の尺度の再検討―. *東京家政大学研究紀要*, **46**, 245-251.

亀口憲治 (1992). *家族システムの心理学：<境界膜>の視点から家族を理解する.* 京都：北大路書房.

北村琴美・無藤隆 (2001). 成人の娘の心理的適応と母娘関係：娘の結婚・出産というライフイベントに着目して. *発達心理学研究*, **12**, 46-57.

北村琴美・無藤隆 (2003). 中年期女性が報告する娘との関係と心理的適応との関連. *心理学研究*, **74**, 9-18.

國吉知子 (2015). 母と娘―その光と闇―. *神戸女学院大学 女性学評論*, **29**, 23-49.

Lichtwarck-Aschoff, A., Kunnen, S. E., & van Geert, P. L. C. (2009). Here we go: A Dynamic Systems Perspective on Emotional Rigidity Across Parent–Adolescent Conflicts. *Developmental Psychology*, **45**, 1364-1375.

水本深喜・山根律子 (2010). 青年期から成人期への移行期の女性における母親との距離の意味：精神的自立・精神的適応との関連性から. *発達心理学研究*, **21**, 254-265.

水本深喜・山根律子 (2011). 青年期から成人期への移行期における母娘関係―「母子関係における精神的自立尺度」の作成および「母子関係の４類型モデル」の検討―. *教育心理学研究*, **59**, 462-473.

諸井克英 (1996). 家庭内労働の分担における衡平性の知覚. *家族心理学研究*, **10**, 15-30.

村重勝也・上地安昭・松本剛 (2007). 娘離れをテーマとする母親との時間制限カウンセリング事例. *生徒指導研究*, **18**, 32-41.

長崎千夏 (2004). 子どもの自立に対する母親の意識と自尊感情との関連：大学生の子どもを持つ母親を対象に. *九州大学心理学研究*, **5**, 163-170.

新美明夫・永田忠夫・松尾貴司 (2006). 初期成人期の母娘関係に関する研究(Ⅱ)―母娘システムの共分散構造分析―. *愛知淑徳大学論集―コミュニケーション学部編―*, **6**, 71-82.

信田さよ子 (1997). *一卵性母娘な関係*. 東京：主婦の友社.

信田さよ子 (2008). *母が重くてたまらない：墓守娘の嘆き*. 東京：春秋社.

大石美佳・松永しのぶ (2008). 大学生の自立の構造と実体―自立尺度の作成―. *日本家政学会誌*, **59**, 461-469.

杉浦健 (2000). ２つの親和動機と対人疎外感との関係―その発達的変化―. *教育心理学研究*, **48**, 352-360.

高木紀子・柏木惠子 (2000). 母親と娘の関係. *発達研究*, **15**, 79-94.

高石浩一 (1996). *母を支える娘たち*. 東京：日本評論社.

田村陽子 (2011). 女子大学生における絆・依存に基づく母娘関係が母親への愛着行動, 交流頻度にもたらす影響. *日本青年心理学会第19回大会発表論文集*, 56-57.

渡邊惠子 (1997). 自立と自己の性の受容(2)：性差の検討. *日本女子大学紀要　人間社会学部*, **3**, 1-14.

渡邊惠子 (2003). 青年期から成人期にわたる父母との心理的関係. *母子研究*, **18**, 23-31.

付記

本論文は，第一著者の研究指導のもとに第二著者が執筆した卒業論文の一部に加筆修正を加えたものです。ご協力いただきました大学生のみなさまとその保護者のみなさまに心より感謝申し上げます。